# Lettres portugaises における《désordre》再考: 二つの cristallisation

寺迫, 紀子

https://doi.org/10.15017/2332639

出版情報:文學研究. 82, pp. 95-122, 1985-03-30. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

## Lettres portugaises における 《désordre》再考

— 二つの cristallisation — (1)

寺 迫 紀 子

I

Lettres portugaises (『ぽるとがる文』) の初版は 1699年、パリの Claude Barbin 書店から出された。 これはポルトガルの一修道女が帰国したフランス 将校に宛てて書き送った五通の恋文からなり、そこには激しい恋情、不実な恋 人への恨み、 絶望、そして 別れを決意するに至る心の 動きが綿々と 委曲をつ くした文章で語られており、発表当時から大成功を収めた。しかしながらこの 書簡集は大いにもてはやされ,多くの文学者達に多大な影響を与えてきながら もある意味でフランス文学の異端児であった。《Au lecteur》に示されてい るように<sup>②</sup>、これはポルトガル語で綴られた手紙をフランス語に翻訳したとい う形をとっている。従ってこの五通の狂おしいばかりの愛の手紙は真実の手紙 と信じられ、ほぼ三世紀の間、文学作品としての研究はほとんどなされること なく、Lettres portugaises をめぐる謎を解く、即ち発信人や受信人、そして翻 訳者を探すことに終始してきたのである。もちろん発表当時から、本物の手紙 の翻訳であるのか、それともフランスの作家の手になる創作であるのかという 問題が提起されてはいた。しかし、真作説をとる側が、まもなくこの恋文が後 に元帥となった chevalier de Chamilly (3) に宛てられたものであり、 さらに 19世紀に入って、 当時ポルトガルの Beja の修道院に Mariana Alcoforado なる修道女が存在したことを発見するに至って、実際に手紙が書かれたと信じ られるようになったのである(4)。

17世紀以来,この作をフィクションとする説が全くなかったわけではない。 自身,後に書簡体小説の傑作 Nouvelle Héroïse を著す J.-J. Rousseau は Lettre à d'Alembert の脚注でLettres portugaises の作者は男性であると断言 する:

Les femmes, en général, n'aiment aucun art, ne se connaissent à aucun, et n'ont aucun génie. Elles peuvent réussir aux petits ouvrages qui ne demandent que de la légèreté d'esprit, du goût, de la grâce, quelquefois même de la philosophie et du raisonnement. Elles peuvent acquérir de la science, de l'érudition, des talents, et tout ce qui s'acquiert à force de travail. Mais ce feu céleste qui échauffe et embrase l'âme, ce génie qui consume et dévore, cette brûlante eloquence, ces transports sublimes qui portent leurs ravissements jusqu'au fond des cœurs, manqueront toujours aux écrits des femmes; ils sont tous froids et jolis comme elles ; ils auront tant d'esprit que vous voudrez, jamais d'âme, ils seroient cent fois plutôt sensés que passionnés. Elles ne savent ni décrire, ni sentir l'amour même. La seule Sapho, que je sache, et une autre, méritièrent d'être exceptées. Je parierois tout au monde que les Lettres portugaises ont éte ecrites par un homme (5).

「一般に女性はいかなる芸術も愛さず、いかなるものにも精通せず、そしていかなる天才も有していない。(…) 魂に熱気を与え赤く燃え立たせるあの天上の炎、焼き尽くし、むさぼり食うあの天才、あの燃えるような雄弁、心の底まで恍惚とさせるあの崇高な熱情などが女性の文章にはつねに欠けているのである。女性の文章はすべて女性に似て冷たくきれいだ。あなたがたが望むだけの才智はあるだろうが、魂がないのだ。女性の文章は情熱的であるよりはむしろその百倍も理性的であるだろう。彼女たちは恋愛さえ描くことも感じることもできないのだ。」と女性の創造力をさんざんに罵倒した後、「私は Lettres portugaises は男が書いたことを賭けてもよい」と続ける。女としては全く聞き捨てならない発言であるが Rousseau の主張の是非を云々するのは当面の問題ではない。ただ、彼が直感的に Lettres portugaises が何らかの文字的意図をも

って構成されたフィクションであると考えたという点だけを心に止め て お こ う。

かなり明確な歴史的資料によって裏付けされた真作説に対して,印象に基く 創作説は分が悪い。 実際, 19世紀後半から 20世紀初頭にかけては Mariana Alcoforado が恋人 Chamilly に書き送ったとする説が多勢を占め, 独語訳を 出した Rilke もそのタイトルに《Alcoforado》の名を冠し,また Edger Prestige の英訳から邦訳を試みた佐藤春夫の 『ぽるとがるぶみ』 にもこの修道女 の名が記されるに至ったのである (6) 。

しかしながら今世紀に入って事態は大きく変わる。まず F. C. Green が 《Who was the author of the Lettres portugaises?》 (7) と 題する論文で真作説に真っ向から対立する立場を表明する。ここで彼は様々な資料の再検討を試みているのであるが,特に注目すべきは Bibliothèque nationale に保管された出版許可記録の研究である。

[en marge] Ce jour d'huy 17 novembre 1668 nous a esté presenté
Barbin un Privilege du Roy donné à paris le 28 Octobre 1668
signé Mageret pour cing années pour un livre intitulé
Les Valentins lettres portugaises Epigrames et Madrigaux de Guilleragues (8).

Green はこの出版許可が『手紙』だけでなく Lettres portugaises を含んだ Guilleragues の作品集に与えられている点, しかも翻訳者としてでなく作者 として Guilleragues の名が挙げられている点に注目している:

The important facts to note are then that the privilege was originally granted not for the *Lettres* alone, but for a recueil of the works of Guilleragues which included the letters: the author's name is given and there is no mention of translation; the name of the author is given as Guilleragues (9).

Guilleragues の名は1669年のケルン版にすでに 翻訳者として 記されていた のであるが、Green 以後、作者とみなされ、F. Deloffre を始めとする多くの 研究者によって、彼の他の作品との関連、『手紙』 そのものの分析を通じて、 創作説はほぼ論証されたといっていいだろう。

「誰が書いたのか」という問題に一応の答が出された今,我々が試みねばならないのは文学作品としての Lettres portugaises の検討である。これまで真作説を支えてきた第一の理由は『手紙』の《désordre》(混乱,無秩序)であった——棄てられて絶望のどん底にある女の手になる手紙は一見何の 秩序 も見い出せない。様々なテーマが一切合財投げてまれた混沌である。そこに自然発生的な不器用さ,本能のままに流される女性らしさが見られてきたのである。しかしながらここで創作説の立場をとった以上,この真作説の根拠であった《désordre》をもう一度考えてみる必要があるだろう:《Les Lettres portugaises sont-elles un chaos —— par maladresse, par spontanéité ou par mystification —— ou bien une œuvre d'art cohérente et calculée?》 「100 「単なるカオスなのか,それとも計算され調和した芸術作品なのか」これこそが真の問題である。

本論ではまず、この《désordre》に注目して Lettres portugaises を再読することから始める。それには書き手の筆致に明らかな変化が見られる第一から第三までの手紙と第四、第五の手紙との二つに分け、それぞれについて《désordre》の内容、意味を検討してゆくことが適当であろう。 さらに手紙再読を通じて、1669年当時としては新しい文学ジャンルであった書簡体小説の手法を選択した作者、Guilleragues の意図なるものを考えてみる。「フィクションを読む」という新しい視点からながめることで、初期の読者に見過ごされてしまった新しい構造が浮かび上ってくるのではないだろうか。

II

#### 第一の手紙

Lettres portugaises の最初の文は手紙の書き手であり、ヒロインである Mariane が、帰国した恋人からのたよりを受け取って間もなく書かれたもので

ある。絶望の暗闇から聞こえてくる彼女の悲痛な独白は Racine 劇を思わせる

Considère, mon amour, jusqu'à quel excès tu as manqué de prévoyance. Ah! malheureux! tu as été trahi, et tu m'a trahie par des espérances trompeuses. Une passion sur laquelle tu avais fait tant de projets de plaisirs, ne te cause présentement qu'un mortel désespoir, qui ne peut être comparé qu'à la cruauté de l'absence qui le cause. (I. 147) (11)

読者はこの唐突な呼びかけ apostrophe で一気に Mariane の置かれた精神的危機に引きずりこまれる。彼女は自分の恋心 $^{(12)}$  ,つまり擬人化した自分の感情に呼びかける。彼女は自分自身に語りかけること,即ち絶望した自分に直面することを恐れている。「どれ程思慮を欠いていたかを考えてごらん」と命ぜられるのは恋心であり,「お前は裏切られたのです。 かわいそうに」 と同情の涙を誘うのも恋心,「かないもしない希望を抱かせて裏切った」 ととがめられるのも恋心であって Mariane ではない。 こうして用心深く綴られていく長い従属節の最後に《absence》という語が出てくる。「恋人の不在」, この「不幸の中でも最も大きな不幸」 le plus grand des maux と La Fontaine によって歌われた「不在」こそ Lettres portugaises 全体を支える鍵なのであるが,この語を口にするや今まで注意深く自分を見まいとしていた Mariane に激しい感情が襲いかかり,もはや恋心のかげに隠れていられなくなる。

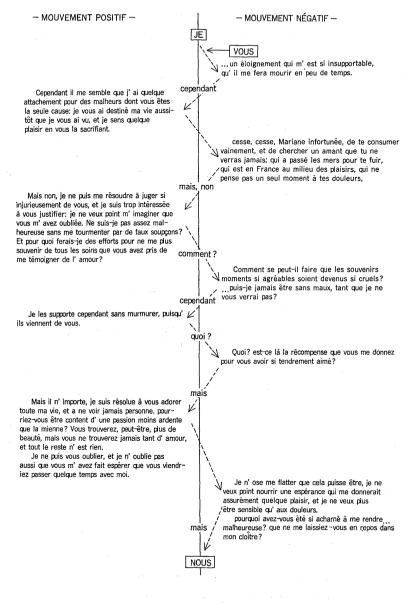
Quoi? cette absence, à laquelle ma douleur, tout ingénieuse qu'elle est, ne peut donner un nom assez funeste, me privera donc pour toujours de regarder ces yeux dans lesquels je voyais tant d'amour, et qui me faisaient connaître des mouvements qui me comblaient de joie, qui me tenaient lieu de toutes choses, et qui enfin me suffisaient? (I, 147)

《absence》が私からあの目を奪った、私に愛と喜びを与えてくれたあの目を 私はもうみつめることができない―――人称の代名詞が堰を切ったようにあふ れでてくる。そして過去の幸せな日々の恋人の眼差しから現在の苦い涙を流す ことしかできない自分の眼へと、従属節から従属節へと連なっていく最後にや っとこの手紙の受信人《vous》が登場する:

Hélas! les miens sont privés de la seule lumière qui les animait, il ne leur reste que des larmes, et je ne les ai employés à aucun usage qu'á pleurer sans cesse, depuis que j'appris que vous étiez enfin résolu à un éloignement qui m'est si insupportable, qu'il me fera mourir en peu de temps. (I, 147)

以上の劇の exposition にも似た長い導入部を経て Mariane の意識は自分 自身の奥深くへもぐってゆき、《vous》を発見する。 この時から手紙はモノロ ーゲ(自分の感情に対する呼びかけはこの一つのヴァリアシオンと見做すべき であろう) としての機能を止め、《ie》と《vous》のディアローグとなる。自 分を棄てて去ってしまった恋人への語りかけは、整然とした導入部に比べると 非常に混乱している。まず Lettres portugaises 全体を通じて言えることであ るが、段落分けがなされていない、いやできないのである。ここに語られてい るものは絶望も希望も、悲しみも喜びも何一つ完結することなくいつの間にか 全く別のものにすりかえられていく。ディアローグはヒロインが「恋人に棄て られた」ことを認識することから始まる、が恋人との別離は「やがて私を死に 至らしめるでしょう」と語りながらも、Manane は絶望の中に止まらない。絶望 のどん底にあって彼女はそれとは逆の心の動きの出発点を見い出すのである: «Cependant il me semble que j'ai quelque attachement pour des malheurs dont vous êtes la seule cause: je vous ai destiné ma vie aussitôt que je vons ai vu, et je sens quelque plaisir en vous la sacrifiant》(I-147) 絶望 に形を与えるや彼女の心はそれとは全く逆の「愛する喜び」に向かう。文の流 れを断ち切り、方向を変えさせる逆接語、「断言したばかりのことを否定する あの 《cependant》」 ces 《cependant》 qui nient ce qu'on vient d'affirmer(13) これこそ Lettres portugaises の《désordre》 の元凶なのである。 ここでこの 《cependant》とそれに類する言葉 (《mais》, 《comment?》, 《non!》, 《quoi

#### Lettres Portugaises における≪désordre≫再考 (寺泊)



?》等)に注目して第一の手紙を分析してみよう。 絶望や後悔, 苦悩といった 自分の愛や恋人を否定するような感情表現を, mouvement négatif, 希望, 喜び, 愛の誓いのように肯定的な感情表現をと mouvement positif して 考え てみると, おおよその構造が浮かび上ってくるだろう。 (⇒図1)

図1に見るとおり mouvement positif と mouvement négatif はほぼ交互にあらわれる。そして両者の仲立ちをしているのが《cependant》なのである。絶望/愛する喜び/悲歎/恋人が戻るかもしれないというかすかな望み/苦悩/互いの愛の確信,そしてこの確信はまた不安にとってかわられる。手紙にはこの二極間を行ったり来たり va et vient する女心が綴られてゆく。

Mariane は相対立する感情に 翻弄されながら、 往復運動の中で 均衡をとる 振り子のように、一つの調和をこの alternatives déchirantes の中に見い出す:

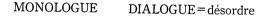
J'accuse seulement la rigueur de mon destin. Il me semble qu'en nous séparant, il nous, a fait tout le mal que nous pouvions craindre ; il ne saurait séparer nos cœurs ; l'amour qui est plus puissant que lui, les a unis pour toute notre vie. (I, 150)

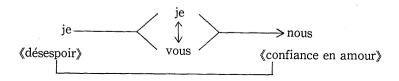
彼女は恋人達をひきさき苦しみを与える運命 destin を呪う, 今の自分の不幸は恋人の裏切りによるものではなく,二人共が苛酷な運命の犠牲者なのだ。こうして《je》と《vous》の対立関係は消滅し,新しく《nous》という代名詞が登場する,いかに酷い運命とて「私達の心を分かつことはできません。運命よりも強い愛が私達の生命の限り二人を結びつけているのですから」第一の手紙はこの互いの愛への確信で終わる。

以上,第一の手紙の構造は,

まず、絶望した《je》のモノローグに始まり、次に、手紙の受取人たる《vous》を見い出し、《je》と《vous》の対立関係の中でのディアローグへと続く。《désordre》が認められるのはこの部分である。最後に、《je》と《vous》は《nous》に統合され、対立関係は消える、この時、Mariane が到達した結

論は手紙の冒頭とは全く矛盾したものである、とまとめられよう。





#### 第二の手紙

最初の手紙を送った後,6ヵ月たっても恋人からのたよりは来なかった。《je n'ai pas reçu une seule lettre de vous depuis six mois》 (II-151)。彼の沈黙は Mariane がやっと見い出していたかすかな希望を打ち崩す:

Il me semble que je fais le plus grand tort du monde aux sentiments (de mon cœur, de tâcher de vous les faire connaître en les écrivant. (II, 151)

所詮,自分の気持ちを理解してくれる相手ではなかったと、悲歎を露わに書き送ったことに苦い後悔をかみしめつつも、恋人を思い切れない Mariane の筆はつい相手への恨み事を綴る:

Il est bien juste, au moins, que vous souffriez que je me plaine des malheurs que j'avais bien prévus, quand je vous vis résolu de me quitter; je connais bien que je me suis abusée, lorsque j'ai pensé que vous auriez un procédé de meilleure foi qu'on n'a accoutumé d'avoir ... (III, 151)

相手への失望は自分が彼を愛してしまったことへの後悔を引き出す:

J'attribue tout ce malheur à l'aveuglement avec lequel je me suis abandonné à m'attacher à vous : ne devais-je pas prévoir que mes plaisirs finiraient plus tôt que mon amour ? (II, 151-152)

#### - MOUVEMENT POSITIE -

#### -- MOLIVEMENT NÉGATIE --

silence de l' amant

PREMIÈRE I ETTRE

certitude ----

→ SECONDE LETTRE

espérance

Il me semble que je fais le plus grand tort du monde aux sentiments de mon cœur de tâcher de vous les faire connaître en les ecrivant:...

il est bien juste, au moins, que vous souffriez que je me plaigne des malheurs que j' avais bien prévis, quand je vous vis résolu de me quitter.

T STATIQU (raison)

DYNAMIQUE (folie) remords

J' attribue tout ce malheur â l' aveuglement avec lequel je me suis abandonnee â m' attacher à vous; ne devais-je pas prévoir que mes plaisirs finiraient plus tôt que mon amour?

### souvenir amer

Il fallait que dans ces moments trop heureux j' appelasse ma raison à mon secours pour modèrer l' excès funeste de mes délices, et pour m' annoncer tout ce que je souffre présentement.....

#### confiance

Vous me faites pitié: je vous défie de m' oublier entièrement; je me flatte de vous avoir mis en état de n' avoir sans moi que des plaisirs imparfaits, et je suis plus heureuse que vous, puisque je suis plus occupée.

#### affliction, supplication

Pourquoi ne suis-je pas incessamment avec vous?

Je ne souhaite rien en ce monde, que vous voir.

Au moins souvenez-vous de moi. Je me contente de votre souvenir, mais je n' ose m' en assurer.

#### plaisir d'amour

Cependant je ne me repens point de vous avoir la adorê, je suis bien aise que vous m' ayez sêduite; votre absence rigoureuse, et peut-être êternelle, ne diminue en rien l'emportement de mon amour; je veux que tout le monde le sache, je n' en fais point un mystère, et je suis ravie d' avoir fait tout ce que j' ai fait pour vous contre toute sorte de biensêance; je ne mets plus mon honneur et ma religion qu' à vous aimer êperdument toute ma vie, poissque l' ai commencé à vous aimer.

Pourquoi fait-il qu' il soit possible que je ne vous verrai peut-être jamais? M' avez-vous pour toujours abandonnée? Le suis au désespoir, votre pauvre Mariane n' en peut plus, elle s' évanouit ên finissant cette lettre. Adieu, adieu, ayez pitié de moi.

過去の愛への不信が引き起こした甘美な思い出とそれ故ますますつらい後悔が Mariane に襲いかかり、失望の中に沈潜していた彼女の心を活性化させる。 手紙はこの時から、第一の文ほど明確ではないが、ほぼ同じような心の揺らめ きの軌跡を描いてゆく。(⇒図2)

この矛盾にみちたゆらめきの中で、第一の手紙においては Mariane の心 が喜びや 希望へと志向していたのに対し、 この手紙では全く別の 展開が見 られる。まず第二の手紙のテーマは「愛してしまったことへの後悔」であ る。「幸せすぎたあの瞬間にこそ理性の救いを求めるべきだった」《il fallait que dans ces moments trop heureux j'appelasse ma raison à mon secours pour modérer l'excès funeste de mes délices, et pour m'annoncer tout ce que je souffre présentement》(III, 152) / 「もう愛さなければこ の不幸から逃れられる」《Je vois bien le remède à tous mes maux, et j'en serais bientôt délibrée si je ne vous aimais plus» (II, 152) / [[] え,できない。忘れるより苦しむ方がいい」《mais, hélas! quel remède! non, j'aime mieux souffrir encore davantage que vous oublier (II, 152)/ 「色褪せた快楽より苦しみの方がいい」 《il vaux mieux souffrir tout ce que je souffre, que de jouir des plaisirs languissantes que vous donnent vos maitresse de France》(II, 152-153)/ 「不完全な快楽しか持てないあなたは 不幸だ」《vous me faites pitié: je vous défie de m'oublie entièrement; je me flatte de vous avoir mis en état de n'avoir sans moi que des plaisirs imparfaits》(II, 153)/ 「苦しみにせよ私は自分の心をすっかり満たしてくれ るものを持っている。だから私の方が幸せだ」《je suis plus heureuse que vous, puisque je suis plus occupée» (II, 153)

以上のようにここでは不幸への志向が見てとれる。Mariane は不信感に苛まれながらも、現在置かれた不幸の中にこそ、己の存在理由を見い出そうとする、苦悩は恋人に対する真の愛の証、自分の愛に自信を持つ彼女は不実な恋人を許し、《je sens une profonde disposition à vous pardonner toutes vos

fautes》(II, 154), 自信に満ちている 《faites tout ce qu'il vous plaira. mon amour ne dépend plus de la manière dont vous me traiterez》(II, 154)。 筆を置く Mariane は絶望のどん底にいる。しかし自分の孤独な愛情に己の価値を見た彼女は恋人を愛し続ける決意を胸にこの絶望の中にしばしの安住の地を見い出すのである。

#### 第三の手紙

第三の手紙は狂乱の文である。恋人の沈黙はさらに続き、前のたよりで表明 した哀しい決意も打ち砕いてしまう: 《Qu'est-ce que je deviendrai, et qu'est-ce que vous voulez que je fasse? Je me trouve bien éloignée de tout ce que j'avais prévu》(III, 155). 孤独の中でたった一人で苦しむ不幸《Helas! que je suis à plaindre, de ne partager pas mes douleurs avec vous, et d'être toute seule malheureuse: cette pensée me tue》(III, 155), そのう ちに相手の不実がだんだん 見えてくる。 Mariane は、 本当は愛されていなか ったのだとの思いに取り憑かれる:《Oui, je connais présentement la mauvaise foi de tous vos mouvements; vous m'avez trahie toutes les fois que vous m'avez dit que vous étiez ravi d'être seul avec moi》(III, 156)。絶 望の中で開かれた眼はあのフランス人士官がただ征服欲を満足させるためだけ に彼女を誘惑したのだという事実をしっかりと見すえる: 《vous aviez fait de sens froid un dessein de m'emflammer, vous n'avez regardé ma passion que comme une victoire, et votre cœur n'en a jamais été, profondément touché》《III, 156》 この残酷な事実を前にしても恋人を思い切ること はできない。彼女の心は千々に乱れる。

錯乱の中で尼僧はそれでも何とか己の拠り所を探そうとする。恋人の自分に 対する愛は信じられない,でも自分の彼に対する情熱だけは真実だ,自分を欺いて彼の得た快楽などよりずっと貴重なものだ:

Je regrette pour l'amour de vous seulement les plaisirs infinis que vous avez perdus : faut-il que vous n'ayez pas voulu en jouir ? Ah!

si vous les connaissiez, vous trouveriez sans doute qu'ils sont plus sensibles que celui de m'avoir abusée, et vous auriez éprouvé qu'on est beaucoup plus heureux, et qu'on sent quelque chose de bien plus touchant, quand on aime violemment, que lorsqu'on est aimé. (III, 156)

「愛されるよりも愛することの方がずっと幸せで感動的なこと」と言う Mariane は自分の愛のさらに明白な証しを求める。死のモチーフがあらわれる。愛のために死ぬ――これ程,愛の力を証明するものがあろうか。しかし燃え上がるような情熱も彼女の生命を奪うことはできない。何も自分の置かれた状況を指示してくれない:《je ne sais ni ce que je suis, ni ce que je fais, ni ce que je désire: je suis déchirée par mille mouvements contraires》(III, 156) 自分が今,味わっている苦しみも後悔も非現実のものに思えてくる:《je sens bien que mes remords ne sont pas véritable》(III, 157)。

彼女の情念は狂気にも似てくる。自分の愛が真実ならすでに息絶えているはず、今なお牛き長らえている自分を彼女はゆるせない:

Je vis, infidèle que je suis, et je fais autant de choses pour conserver ma vie que pour la perdre. Ah! j'en meurs de honte : mon désespoir n'est donc que dans mes lettres ?(III, 157)

Je vous ai trahi, je vous en demande pardon. Mais ne me l'accordez pas! Traites-moi sévèrement! Ne trouvez point que mes sentiments soient assez violents! Soyez plus dificile à contenter! Mandez moi que vous voulez que je meure d'amour pour vous! (III, 158)

奇妙な転換である。ひたすら恋人を愛し続けてきたはずの Mariane が不実なのは自分であり、欺いたのは自分であるというのだ。彼女の言う裏切とは恋人の心変わりに絶望しながら死ねなかったということなのだが。彼女は恋人に死の宣告を下してくれるよう願う。

死は彼女にとって「救い」である。心を迷わせる女の性の弱さを乗り越えさせ, 耐えがたい心の 振子運動を止めてくれるのは死という真の絶望だけだ:

《…afin que je surmonte la faiblesse de mon sexe et que je finisse toutes mes irrésolutions par un véritable désespoir》(III, 158)。しかしこのような理不尽な願いが聞き入れられるはずもない,情熱を消し去ることもできない。不幸が唯一,自分の愛の証しならこの耐え難い状態を受け入れよう:《je connais (…) que j'aime bien mieux être malheureuse en vous aimant, je consens donc sans murmure à ma mauvaise destinée》(III, 158)。これは愛を貫こうとする決意表明である。相手の思惑を,いやその愛の対象をすら消し去った情熱そのものへの志向である:《je déteste la tranquillité où j'ai vécu avant que je vous connusse. Adieu. ma passion augmente à chaque moment》(III, 159)。

これまで見てきた前半三通の手紙は相反する心の動きの中で苦しむ尼僧の姿をあらわしていた。では不安定な感情のほとばしりの中でやっと平衡を保っている Mariane の心理に我々は何を見るべきであろうか。 Lettres portugaises から大きな影響を受けた文学者達のうちの一人, Stendhal は  $De\ l'Amour$  の中で,このポルトガル尼僧の恋を「情熱恋愛」amour-passion のモデルとして挙げている。彼はこの「情熱恋愛」の過程を段階を追って次のように規定している:(14)

de la Naissance de l'Amour

- 1° L'admiration.
- 2° On se dit : quel plaisir de lui donner des baisers, d'en recevoir, etc!
- 3° L'espérance.
- 4° L'amour est né, Aimer, c'est avoir du plaisir à voir, toucher, sentir par tous les sens, et d'aussi près que possible un objet aimable et qui nous aime.
- 5° La première cristallisation commence. On se plaît à orner de mille perfections une femme de l'amour de laquelle on est sûr; (...)
- 6° Le doute naît. (...) L'amant arrive à douter du bonheur qu'il se

promettait; il devient sévère sur les raisons d'espérer qu'il a cru voir. Il veut se rabattre sur les autres plaisirs de la vie, *il les trouve aneantis*. La crainte d'un affreux malheur le saisit, et avec elle l'attention profonde.

手紙を書こうと決意した Mariane はこの第6段階に位置していたといえよう。「恋する女はあてにしていた幸福を疑い出す」この疑惑が彼女にペンを執らせる。

7° Seconde cristallisation. Alors commence seconde cristallisation produisant pour diamants des confirmations à cette idée: Elle m'aime. A chaque quart d'heure de la nuit qui suit la naissance des doutes, après un moment de malheur affreux l'amant se dit: Oui elle m'aime; et la cristallisation se tourne à découvrir de nouveaux charmes; puis le doute à l'œil hagard s'empare de lui, et l'arrête en sursaut. Sa poitrine oublie de respirer; il se dit: Mais est-ce qu'elle m'aime? Au milieu ce ces alternatives déchirantes et délicieuses, le pauvre amant sent vivement: Elle me donnerait des plaisirs qu'elle seule au monde peut me donner.

恋する男 amant を恋する女 femme amoureuse に置き換えて読んでみよう;「恋する女は15分毎につぶやく,『そう,彼は私を愛している』と...とものす ごい目をした疑惑が彼女をとらえ,にわかに・・彼女をひきとめる。胸は呼吸を 忘れる。彼女は自問する,『でも彼は私を愛しているのかしら』...」この痛ま しい交互作用 alternatives déchirantes の最中にある恋する女の姿は Mariane その人である。

しかしながら、彼女は Stendhal の恋人とは異なり、「愛されている」という確信を結晶させることはない、恋人の沈黙がこの結晶作用 cristallisation を中断させ、これまで Mariane の純な心が築いてきた結晶を破壊するようしむけてゆくのである。 それは  $De\ l'Amour$  の著者が言うように最も痛ましい瞬間である。

この結晶作用に失敗しに彼女は恋の炎を消し去ったか、いや、さらに炎は大きく燃えあがり、《ma passion augmente à chaque moment》、次なる新しい展開を見せるのである。

#### \* \* \*

前に述べた通り、《désordre》は Lettres portugaises の特性として常に強調されてきた。naturel, spontanéité の証拠として真作説派に指摘されてきたわけだが、この説が否定された今、この《désordre》を生み出す手法とその意味をここで検討する必要があるだろう。

作者 Guilleragues はこのために《période》の概念を捨てたと指摘するのは Deloffre である<sup>(15)</sup>。即ち,文の始まりと終りがうまく対応しているような「閉じた文」の整然さを求める代りに,文を開くことに心を遣っているのだ。Deloffre はその具体的な手法として「つけ加え」addition と一つの単語の sens figuré から sens propre への移行を挙げている。

(例1) Une passion sur laquelle tu avais fait tant de projets de plaisirs ne te cause présentement qu'un mortel désespoir, qui ne peut être comparé qu'à la cruauté de l'absence qui le cause. (I, 147)

この文が《désespoir》で終わっていたなら、これは閉じている。ところが qui 以下の関係節を付け加えることで 《absence》 という新しい idée に向かって 開かれてしまったのである。

(例2) Comment se peut-il faire que les souvenirs des moments si agréables soient devenus si cruels? et faut-il que, contre leur nature, ils ne servent qu'à tyranniser mon  $c \alpha u r$ ? Hélas! votre dernière lettre le réduisit en un étrange état : il eut des mouvements si sensibles qu'il fit, ce semble, des efforts pour se séparer de moi, et pour vous aller trouver ; je fus si accablée de toutes ces émotions violentes, que je demeurai plus de trois heures abandonnée de tous mes sens.

(I, 148)

この例では《cœur》のもつ sens figuré から sens propre への移行によって,精神的苦痛の記述が,肉体的苦痛への記述へと開いてゆく。Deloffre の示した以上二つの手法の外にもう一つ考えねばならないものがある。価値の移行とでも言うべき方法である。

(例3) Je sens le moins qu'il m'est possible de ma chambre, où vous êtes venu tant de fois, et je regarde sans cesse votre portrait, qui m'est mille fois plus cher que ma vie. Il me donne quelque plaisir; mais il me donne aussi bien de la douleur, lorsque je pense que je ne vous reverrai peut-être jamais; pourquoi faut-il qu'il soit possible que je ne verrai peut-être jamais? M'avez-vous pour toujours abandonnée? (II, 154)

この例で問題となる語は《portrait》である。 恋人に去られてすっかり人嫌いになった Mariane は自室に閉じこもり,彼の肖像を手にする。 肖像で恋人を偲ぶことは彼女にとって「喜び」 plaisir である。ところが 「もはや相まみゆることがないのかと考える時」,この同じ肖像が「苦しみ」 douleur の対象と変わる。つまり肖像画の持つ価値が《plaisir》から《douleur》へ移行,というよりは逆転しているのである。ここで導入された《douleur》はさらに《abandon》という全く新しい idée を引きずってき,文はさらに開かれてゆく。

Deloffre はこの手法については 言及していないが、むしろ Lettres portugaises の《désordre》の根底をなしているのは、この価値の移行、逆転であろう。mouvement positif から mouvement négatif へ、後者から前者へとヒロインをつき動かすもの、それは己の心に浮かびあがってくる一つの idée を言葉にするや、その言葉の持つもう一つの、そして全く逆の価値を見い出すという恋する女の心の不可解な機能である。そしてこれら二つの相反する価値の仲立ちとするのが《cependant》なのである。

こうして語られてゆく Mariane の内面生活の軌跡は従って 矛盾に満ちている。 同時代の同じテーマを扱った Racine の悲劇の抽象化された 純粋な嘆きや、Mme de Lafayette の小説の明晰に分析された論理性にはほど遠い。ここ

ではヒロインの内面からほとばしり出る言葉が何の操作も受けずに記されてゆく。話すように書かれ、生きた時をその瞬間に語る、乱れきった感情の深さを描くことが可能なのは、悲劇でも小説でもなく、ただ書簡だけである。作者の影を排除し、あえて無秩序そのものの心理劇を写し出す――真作説を三世紀もの間支えてきたこの《désordre》こそが Guilleragues の芸術であるといえよう。

#### TIT

#### 第四の手紙

嵐の知らせが恋人の部下を通じてもたらされる。Mariane は男の身を案じペンを執る。しかし自分には一向にたよりを寄越さない恋人が部下とはいつも連絡をとっていたということは彼女にとっては大きなショックだった。これまでの苦悶の日々が一時によみがえり,彼女は恋人に対する愛と恨みに胸を引き裂かれる思いがする。《Votre injustice et votre ingratitude sont extrêmes》(IV, 160)と相手の不実をなじりつつ,まだ残酷な現実に目をつぶろうとする:《Je résiste à toutes les apparences, qui me devraient persuader que vous ne m'aimez guère et je sens bien plus de disposition à m'abandonner aveuglement à ma passion, qu'aux raisons que vous me donnez de me plaindre de votre peu de soin》(IV, 160)。

第四の手紙はこの書簡集のでもっとも長いものであり、相変わらず揺れ動く 女心を綴ってはいるが、その調子は前半の三通に比べ、それほど痛々しいもの ではない。そこに悲しい事実を受け入れようとする Mariane の努力が見られ る。その第一のあらわれが énumération の多用である:

Vous m'avez consommée par vos assiduites, vous m'avez enflammée par vos transports, vous m'avez charmée par vos complaisances, vous m'avez assurée par vos serments, mon inclination violente m'avez séduite; (...) (IV, 161)

「あなたは私の心を捕えた…私の心に火を点けた…私を惑わせた…私にあなた

の誓いを信じてませた…」この vous m'avez + p. p. の構文は明らかに, 征服欲だけで自分を誘惑した男に対する非難である。己に一つ一つ言い聞かせるように列挙されていく文は, しかもこれまでのように全く反対の方向へ開くことはしない。「あんなにも幸福であって始まりが今では涙と 溜息とはかない死を残すのみです」《les suites de ces commencements si agréables et si heureux ne sont que des larmes, que des soupirs, et qu'une mort funeste, sans que je puisse y porter aucun remède》。

さらに「もしもあの時…していたら」si j'avais + p. p. という後悔の列挙, 相手を問いつめてゆく pourquoi? の列挙等の例をあげておこう:

Si j'avais résisté avec opiniâtreté à votre amour, si je vous avais donné quelque sujet de chagrin et de jalousie pour vous enflammer davantage, si vous aviez remarqué quelque ménagement artificieux dans ma conduite, si j'avais enfin voulu opposer ma raison à l'inclination naturelle que j'ai pour vous, dont vous me fîtes bientôt apercevoir...(IV, 161)

pourquoi avez-vous donc souffert que je devinsse en l'état où je me trouve? Qu est-ce que vous vouliez faire de tous mes emportements, qui ne pouvaient vous être que très importuns? Vous saviez bien que vous ne seriez pas toujours en Portugal, et pourquoi m'y avez-vous voulu choisir pour me rendre si malheureuse?

これらについても文が閉じている点では同じである。殊に詰問の列挙の例が相 手に対する皮肉で閉じられているのは注目に価するだろう:

vous eussiez trouvé sans doute en ce pays quelque femme (······) avec laquelle vous eussiez eu autant de plaisir, puisque vous n'en cherchiez que de grossiers, (······) que le temps eût pu, consoler de votre absence, et que vous auriez pu quitter sans perfidie et sans cruauté.

(IV, 162)

「あなたのようにいかれたプレイボーイには束の間の快楽のみを求める浮れ女

で十分」という痛烈な皮肉で終わっているのだ。 この ironie も第四の手紙で 初めてあらわれる新しい面である:

Tout le monde est touché de mon amour, et vous demeurez dans une profonde indifférence, sans m'écrire que des lettres froides, pleines de redites (IV, 764)

「閉じの不在」absence de fermeture (16) が乱れきった感情の激しい起伏をあらわしていたのに対し、文の完結と ironie という現象は覚醒した明晰な判断を意味していると言えよう: 《puis-je espérer de mes lettres et de mes reproches ce que mon amour et mon abandonnement n'ont pu sur votre ingratitude? Je suis trop assurée de mon malheur, votre procédé injuste ne me laisse pas la moindre raison d'en douter.》(IV, 165)

不実で恩知らずで征服欲に取りつかれた暴君,愛する能力のない男,Mariane はこの彼への情熱を消し去ることができたであろうか:

Que ferais-je hélas! sans tant de haine et sans tant d'amour qui remplissent mon cœur? Pourrais-je survivre à ce qui m'occupe incessamment, pour mener une vie tranquille et languissante? Ce vide et cette insensibilité ne peuvent me convenir. (IV, 163)

愛も憎しみも全て含めて、あなたにも心を満たしてくれた情熱なしに自分はもう生きてゆけない……今となっては彼女の唯一の生きる拠り所はこの情熱だけである。何の恥じるところとてない、公明正大な愛《Il me semble que je dois être bien aise de n'avoir pas été infidèle, et je ne voudrais pas, pour toutes les choses du monde, avoir commis une action si noire》(IV-163)と自負する Mariane にもはや、その愛の対象であった、しかしその愛にふさわしくない男など必要ない。恋の思い出を、苦しみを書き連ねた手紙はもはやかつての恋人に宛てられたものではない。彼女は情熱の衝動に駆られ、自分の胸のうちにあるものすべて、「あり余る悲しみ、とりとめもつかぬ思案、激情の矛盾、信頼、願い、嫉妬」 l'excès de mes douleurs、l'incertitude de

mes projets, la diversité de mes mouvements, mes confiances, mes souhaits, ma jalousie を自分自身のために書く:《J'écris plus pour moi que pour vous, je ne cherche qu'à me soulager.》(IV, 166)

第四の手紙で Mariane の心理は全く新しい展開を見せた。 第三の手紙でその頂点に登りつめた絶望の進行はここでとぎれる。愛そのものを愛し,書くことで充足感を得ようとしているのがこの手紙の特徴である。「書くのを止める」ことが彼女にとって一種の強迫観念となり,手紙は長く混乱したものとなっていくのである:《Adieu, j'ai plus de peine à finir ma lettre, que vous n'en avez eu à me quitter, peut-être, pour toujours》(IV, 167-168)

#### 第五の手紙

最後の手紙は諦念と別離を告げる文である:

Je vous écris pour la dernière fois, et j'espère vous faire connaître, par la différence des termes et de la manière de cette lettre, que vous m'avez enfin persuadée que vous ne m'aimiez plus, et qu' ainsi je ne dois plus vous aimer. (V, 169)

第四の手紙で lucidité を取り戻したはずの Mariane であったが,それでも決定的にこの惑乱状態から脱け出し,恋人に別れを告げるには彼から一通の手紙を受け取る必要があった。そこにあらわれた無礼な抗弁と笑うにたえぬ慇懃 vos impertinentes protestation d'amitié et les civilités ridicules de votre dernière lettre. (V, 170)はもはや彼女に幻想を抱くことを許さない。彼が沈黙を守っているうちはかすかなものにせよ可能性が残っていた。沈黙は必ずしも拒絶をあらわすわけではないからだ。彼の本心を知らずにいられたら…Mariane の 口調には怒りの色がにじんでくる:

Je déteste votre bonne foi, vous avais-je prié de me mander sincèrement la vérité? Que ne me laissiez-vous ma passion? Vous n'aviez qu'à ne me point écrire, je ne cherchais pas à être éclaircie. (V, 171) 音信の途絶えは耐え難い、が自分に何ら関心を持ってくれていない事実を知る ことに比べれば何でもないことだった。彼女にとっては真実を知るよりだまさ れている方が良かったのだ。今の Mariane にはこう宣言するしかない:

«Sachez que je m'aperçois que vous êtes indigne de tous mes sentiments, et que je connais toutes vos méchantes qualités.» (V-171)

だがこの宣言の後、すぐにペンを置くことはできず、延々 200 行以上にもわたって、恋人と別れてから味わったあらゆる感情を書き連ねる、と同時にこれまでになく、尼僧の身で恋に身を妥ねた罪を恥じ、《J'ai vécu longtemps dans un abandonnement et dans une idolâtre qui me donne l'horreur, et mon remords me persécute avec une rigueur insupportable, je sens vivement la honte des crimes que vous m'avez fait commettre》(V, 175)、純心な少女だった自分を誘惑した男の卑劣さをなじり、《j'étais jeune, j'étais crédule, on m'avait enfermée dans ce couvent depuis mon enfance, je n'avais vu que des gens désagréable》(V. 176)、一門の復讐を暗示する《Si quelque hasard vous ramenait en ce pays, je vous déclare que je vous livrai à la vengeance de mes paravents》(V, 175)。

これほどの防禦の壁を築きながら、自分の決意を崩すには、恋人のほんの一言のやさしい言葉で十分なのを知る Mariane は時折、悲痛な声を上げる。「手紙をもう書かないで下さい」「私にもうかまわないで下さい」:《je vous conjure de ne m'écrire plus, et de m'aider à vous oublir entièrement》、《ne vous mêlez donc point de ma conduite, vous renverseriez, sans doute. tous mes projets, de quelque manière que vous voulussiez y entrer》、《ne troublez pas l'état que je me prépare》、《Ne m'otez point de mon incertitude; j'espère que j'en ferai, avec le temps, quelque chose de tranquille》、これらの懇願が様々な感情をあらわす言葉の洪水にパテティックなアクセントを与える。

第五の手紙はカタルシスの機能を果たしているといえよう。あらゆる規制を

解かれ、 Mariane は己の心中を洗いざらい語る。彼女はあきらめようとしながらも現れる執拗な恋心を文字に記すことであきらめに達してゆく《Enfin je suis revenue、de cet enchantement》(V, 176)。そして尼僧 Mariane は再びこの恋文を書き始めた時と同じく、たった一人で自分の恋心と向かいあうのである。

Mariane にとって手紙は恋人とコミュニケーションをはかる唯一の方法であったが、また自分をあらわす手段でもあるのだ。「私はあなたのためというよりは自分のために書いております」《J'écris plus pour moi que pour vous》、彼女がこう言うのは Stendhal 風の結晶作用、即ち恋人に対する cristallisation が失敗に終わった 時であり、自分の情熱そのものを 愛し始めた時であった:《J'ai éprouvé que vous m'étiez moins que ma passion》(V, 170)。これ以後、écriture は自分自身の情熱を浄化し、あらゆる不純物――恨みや後悔、そして愛の対象であった男すら――を除いてゆく手段となるのである。後半二通の手紙における《désordre》に従って、前の三通のように mouvement positif と mouvement négatif の交代としてあらわれるのでなく、すべて吐き出してしまおうとするカタルシスの結果であるといえよう。 さて《cristal》なる語は《pureté》を意味するのであるから、この情熱純化の過程もまた cristallisation と呼ぶことができるだろう。

では「情熱そのものを愛する」とはどういうことであろうか。 D. de Rougemont はその名著, *l'Amour et l'Occident* の中でこう定義している:

Passion veut dire souffrance, chose subié, préponderance du destin sur la personne libre et responsable. Aimer la passion pour elle-même, (······)c'est aimer et chercher la souffrance. Amour-passion : désir de ce qui nous blesse, et nous anéantit par son triomphe.» (17)

Lettres portugaises にはその《désordre》のベールを透して二つの cristallisation の過程が見えた。一つは赤く燃え上がる恋の cristallisation であり、これは中途で失敗に終わる。もう一つは冷たく燃える青い炎のような情熱のそれ

である。が,「愛そのものを愛すること,情熱をそれ自体として愛することは,苦悩を愛し求めることに他ならない」。この第二の cristallisation は完成するものの,これもまた恋する尼僧に喜びをもたらすものではない。従って, $Lettres\ portugaises\$ を《cristallisation tragipue》の作品を定義することもできるであろう。

#### IV

さて、Lettres portugaises がフランス文学史上、初の書簡体小説であることは衆目の一致するところである  $^{(18)}$  。 J. Rousset はそのすぐれた書簡体小説論 Forme litteraire: le Roman par Lettres の中で、この17世紀後半に始まり18世紀に最盛期を迎える文学ジャンルの発展の段階を分析しているが、Lettres portugaises は書簡体小説の最も初期の形態である独唱型 roman à la voix soliste  $^{(19)}$ に属しているとする。J. Rousset はただ一人の書き手がただ一人の相手に手紙を書き送る型をこう定義しているのであるが、Lettres portugaises はさらに外界とのコンタクトを完全に絶たれた特殊な状況を設定している。まず Mariane は修道院の壁で外の世界から隔離されており、五通の手紙を通じてほとんど事件らしい事件は起こらない。さらに相手からの音信がほとんどない。そもそも彼女にペンを執らせることになる別れの手紙と彼女に決定的な別離を決意させる素っ気ない手紙の二通がわずかに暗示されるだけである。

不在の受取人はしかし、書き手である Mariane の中に確かに存在している。彼女はこの目に見えない人物に語りかける:《Il me semble que je vous parle quand je vous écris, et que vous n'êtes un peu plus présent》. 彼女にとって手紙は去ってしまった恋人と語り合う唯一の手段である。読者は一方通行の手紙の中にディアローグを見る。目に見えない受信者は過去の恋物語に属するロマネスクな存在だ。彼はヒロインを時折、現実の苦しさからひきはなし、しばしばロマネスクな夢を見させる。私は前に第一から第三の手紙を Mariane の心の mouvement positif と mouvement négatif の交代という観点か

ら分析した。これはまた過去の、そして仮定のロマネスク性と現実の非ロマネスク性との交代と言いかえることが可能であろう。そして第一の cristallisation とは現在の反ロマネスク的苦悩の状態において、恋人という小枝にロマネスクのダイヤモンドを結晶させていこうという試みに他ならなかったのである。(実際は彼は「不実な誘惑者」というロマネスク的存在にあるまじき人物なのであるが)

遠すぎる恋人はしかし、その沈黙故にだんだんと姿を消してゆく。恋人に語りかけていた言葉は自分自身への呼びかけへ、返答のないディアローグはモノローグへと変わってゆく、第四、第五の手紙にみられるのは飢えた独白だ。言葉で空虚を埋めようとするかのような、言葉で情熱の激しさ、思いの深さを計ろうとするかのような言葉の洪水だ。ディアローグからモノローグへ、第一のcristallisationから第二のcristallisationへと展開してゆくには恋人の沈黙が必要条件であったのだ。Lettres portugaises はこのように独唱型書簡体小説の特性を見事に生かした作品であると言えよう。

#### \* \* \*

Lettres portugaises は二つの意味で17世紀後半という時代の要求に答えた作品である。まず当時の文学事情を考えてみると、1660年以降、小説のジャンルでは物事をあるべき姿で描くロマネスク小説の非現実性が飽きられ、物事をあるがままに描こうとする気運が高まっていた。この新しい小説観を実現してゆくための新しい形式の追求が論じられる中で Guilleragues が「書簡体小説」というこれまでになかった形と手法を選んだことは大きな成功であった。(なにしろ三世紀にもわたって本物の手紙と信じられてきたのである)次に、内容の問題、この五通の恋文の中に我々が見るのは、棄てられた女の感情の刻々の変化のドラマである。その根底には当時、知識人(La Rochefoucaud やMme de Sablé等)の間で広く唱えられていたペシミスティックな恋愛観が流れている。情熱は人間の理性を押し流し、混乱のみを与える——この dé-

sordre de l'amour を生の証言の形で提示したのがこの作品である。Guilleragues は作品の中で自分の思想をとうとう論じようとするのでなく、あくまでも本物の人間の心のあり様をそのまま示そうとしているのである。そのためには作者としての己の姿を消してしまうことも辞さない。そうして選ばれたのが「書簡体小説」という形式であったのだ。

ところで「書簡体小説」の特性は J. Rousset やB. Bray 等によって様々に 分析されているが、結局、Montesquieu が *Lettres persanes* に付した《Quelques reflexions》中の次の一文に尽きるであろう:

D'ailleurs, ces sortes de romans réussissent ordinairement, parce que l'on rend compte soi-même de sa situation actuelle; ce qui fait plus sentir les passions que tous les recits qu'on en pourroit faire. Et c'est une des causes du succès de quelques ouvrages charmans qui ont paru depuis les *Lettres persanes*, (20)

「書簡体小説」では作中人物は先の見通しのないまま,ただ自分の面前に繰り広げられてゆく現実を書き送る。つまり自分の生を生きると同時に語ってゆくのである。現在をそのまま把握することで人間の感情のゆらめきをその流れの中で描いてゆく,最初の印象が次の瞬間,全く別の印象に置き換えられることもまれではない。 Mariane の矛盾に満ちた心理を何の疑問もなく受け入れられるのはこれが書簡であるからであり,彼女の現実そのままであるということを読者が暗黙のうちに了解しているからなのである。

最初に、書簡の真作説を支えてきたにのが、手紙の自然らしさの根拠となる《désordre》であったと述べたが、フィクションとしての観点から再読、分析した今、次のように言いなおすべきであろう。 作者 Guilleragues が実際に描きたかったのはまさにこの《désordre de l'amour》であった、 そしてこの主題には「書簡体小説」という形式が必要不可欠であったのだ、と。

#### 「注了

- (1) 本論は1984年6月,第二回九州大学仏語仏文学研究会において口頭発表した《Sur les Lettres portugaises——la cristallisation tragique——》に基づくものである。
- (2) «...une copie correcte de la traduction de cinq Lettres portugaises qui ont été écrites à un gentilhomme de qualité, qui servait en Portugal. » Guilleragues: Lettres portugaises, ed. par F. Deloffre et J. Rougeot, Droz (coll. TLF), 1972, p. 145.
- (3) ケルン版, Lettres d'amour d'une religreuse écrites au chevalier de C., officier en Portugal (1669) の中に《Le nom de celuy auquel on les a ecrites, est Monsieur Le Chevalier de Chamilly》なる一文が見られる。 cité par F. Deloffre: op. cit.

Chamilly が受信人らしいということは当時一般に認められていた。 Saint-Simon は Mémoires の中で老いた Chamilly の姿を描き,「Lettres portugaises の寄せられた往年の貴公子」としている。しかし彼は凡庸な人物であったらしく, Saint-Simon はこのことに驚きをかくさない。

«...II avait servi avec réputation en Portugal et en Candie. A le voir et à l'entendre on n'auroit jamais pu se persuader qu'il eût inspiré un amour aussi démesuré que celui qui est l'âme de ces fameuses *Lettres portugaises*, ni qu'il eût écrit les réponses qu'on y voit à cette religieuse.» (1703, Bibliothèque de la Pléiade, Tome II, p. 154)

«Le maréchal de Chamilly mourut à Paris le 7 janvier, après une longue maladie, à soixante-dix-neuf ans, C'étoit un grand et gros homme, fort bien fait, extrêmement distingué par sa valeur, par plusieurs actions, et devenu célèbre par la défense de Grave, On en a parlé ailleurs à diverses reprises. Il étoit fort homme d'honneur et de bien, et vivoit partout très honorablement; mais il avoit si peu d'esprit qu'on en étoit toujours surpris, et sa femme, qui en avoit beaucoup, souvent embarassée. Il avoit servi jeune en Portugal, et ce fut à lui que furent écrites ces fameuses Lettres portugaises par une religieuse qu'il y avoit connue et qui étoit devenue folle de lui.» (1715, Bibliothèque de la Pléiade, p. 604)

- (4) Lettres portugaises をめぐるこの謎解きの経緯については以下の研究にくわしい。
   島田謹二:「佐藤春夫譯『ぱるとがる文』――飜訳文学研究――」『比 較 文 学 研 究』 2(2), 東京大学, 1955, pp. 1-42.
  - F. Deloffre: «L'Enigme des Lettres portugaises» dans les Lettres portugaises, Garnier, 1962.
  - F. Deolffre: «L'Histoire des Lettres portugaises» dans les Lettres portugaises, Droz, 1972.
- (5) J-J. Rousseau: Note à la Lettres à M. D'Alembert sur les spectacle, Garnier, 1960, p. 206. 訳は西川長夫訳『演劇に関するダランベール氏への手紙』, 白水社(ルソー全集第8巻), 1979, p.126.

- (6) Portugiesische Briefe Briefe der Marianna Alcoforado, Uebertragen von Rainer-Maria Rilke (1907).
  - 佐藤春夫訳『ぽるとがるぶみ』人文書院(初版は1929) これは英訳本 The Letters of Portuguese Nan by Edger Prestage (1893) からの翻訳である。
- (7) F. C. Green: (Who was the author of the Lettres portugaises?), The Modern Language XXI, 1926, pp. 159-167.
- (8) Cité par Deloffre, op. cit., p. 80.
- (9) F. C. Green: art. cit., p. 162.
- (10) H. Coulet: le Roman jusqu'à la Révolution, Armand Colin (coll. U), 1967, p. 224
- (ii) Guilleragues: Lettres portugaises ed. par Deloffre et Rougeot, Droz (coll. TLF), 1972. 手紙からの引用は全てこの版によるものとし、ローマ数字で手紙の番数を、アラビア数字で百数を表記する。
- (2) この《mon amour》の解釈については、Léo Spitzer や Deloffre-Rougeot を始め とする amour-amant とする説と Reiner, Coulet 等, amour-passion とする説が あり、Deloffre と Reiner は 1965年, *Romanische Forschungen* 誌上で論争を行 なっている。
  - cf. W. Leiner: «Vers une nouvelle Interprétation des Lettres portugaises, Mariane entre son amour et son amant», Romanische Forschungen 77, 1/2, 1965, pp. 64-74.
  - W. Leiner: «De nouvelles Considérations sur l'Apostrophe initiale des Lettres portugaises» Romanische Forschungen 78, 4, 1966, pp. 548-566.
  - F. Deloffre: (A propos des Lettres portugaises) Romanische Forschungen 77, 3/4, 1965, pp. 351-352.
  - この興味深いテーマについては改めて、「《Considère, mon amour...》 試論——amour-amant と amour-passion」と題して論文を準備中である。
- (13) J. Rousset: «le Roman par Lettres» dans Forme et Signification, José Corti, 1962, pp. 77-78.
- (14) Stendhal: De l'Amour, ed. par H. Martineau, Garnier, (coll. Classique Garnier), 1959, pp. 8-11.
- (is) «Ce que Guilleragues abandonne d'abord, C'est la conception de la "période" Deloffre : op. cit., p. 128.
- (16) ibid.,
- (17) D. de Rougemont: L'Amour et l'Occident, Plon (coll. 10/18), 1972, p. 53.
- (18) 《(les Lettres pcrtugaises) est aussi la forme première du roman par lettres, qui atteint d'un coup au chef-d'œuvre.)》
  - J. Rousset: «Une forme littéraire: le Roman par Lettres» dans Forme et Signification, José Corti, 1962, p. 77.
  - «On admet fort légitimement que (les Lettres portugaises) constitue l'un des tout premiers exemplaires du roman par lettres en France.»
  - B. Bray: L'Art de la Lettre amoureuse, des Manuels aux Romans (1550-1700), Mouton, 1967, p. 23.
- (19) J. Rousset: op. cit., p. 76.
- (20) Montesqieu: «Quelques réflexions sur les Lettres persanes» dans les Lettres persanes, ed. par Henri Barckhausen, Hachette, 1913, p. 1.